

はじめに

北宋の蘇軾は、その著書で秦觀の次の言葉を紹介している。

①秦少游言、「人才各有分限。杜子美詩冠古今、而無韻者殆不可読。曾子固以文名天下、而有韻者輒不工。此未易以理推之也」。

〔秦觀は言う。「人の才能にはそれぞれ限りがあって、なんでもできるわけではない。杜甫の詩は古今を通じて最も優れているが、散文となるとほとんど読むに値しない。曾鞏は散文によって天下に名が知れているが、詩となるとだいたい不出来だ。こればかりは理屈では測りきれない」と。〕

（「記秦少游論詩文」、『蘇軾文集』第五冊、中華書局、二一三六頁）

佐藤浩一氏は、この発言が北宋当時から影響力を持っていた蘇軾の著作によって発信されたことで、杜甫の散文は「不工」であるという認識が広く拡散し、後世での共通認識になったと指摘する<sup>(1)</sup>。また、氏は清の申涵光の言葉を引いて、杜甫の「不工」と評価される散文は、四字句・六字句である程度のまとまりを見せる駢文ではなく、不定型句で構成された古文であることに注目する。

②申涵光曰、「序不易解。杜文長至數語、便期期不能達意。如『夔人屋壁』・『平章鄭氏女子』・『公孫大娘』等篇、世人附會以為古、其實不明。詩小序、莫妙於元次山、杜短語多有佳者」。

〔申涵光は言う。「序文はなかなか読みづらい。杜甫の文はそれなりの長さになると、とたんに口下手になって意味がよく伝わらなくなる。たとえば、『課伐木』・『送大理封主簿五郎……』・『觀公孫大娘弟子舞劍器行』などは、世の人々は古体の文だなどこじつけているが、実際はよく分かっていないのだろう。詩の短い序文では、もとより元結の妙味に及ぶ者はないものの、杜甫の短文には優れたものが多い」と。〕

（「仮山」序文の注、『杜詩詳注』巻一、中華書局、二十八頁※以下『詳注』と略称）

氏は特に「課伐木」の序文を取りあげて検討を加え、前半は四言を基調としていて句読を切りやすく、リズムカルな面で読みやすいとし、後半はこのリズムがくずれた雑言で句読が切りづらく、内容の面でも理解するのが難しいとしている<sup>(2)</sup>。この後半部分がいわゆる古文体であるが、前半の駢文調の部分にも読みづらいところはある。たとえば、「入谷斬陰木、人日四根止（谷に入りて陰木を斬り、人ごとに日に四根にして止めしむ）」の後句などは、助字がそぎ落とされているせいで、「各人、一日に四本まで伐採させた」とは初見では理解しづらいであろう。定型句であるという思い込みがかえってこの句を読みづらくさせているともいえる。

杜甫の文は、駢文が優れるという意見は宋代からある。

③世言、「子美詩集大成、而無韻者幾不可読」。然開・天以前文体大略皆如此。若「三大礼賦」、辞氣壯偉、又非唐初余子能及也。

〔世間では、「杜甫は詩の集大成者だが、散文となるとほとんど読むに値しない」という。しかし、開元・天宝以前の文体など、だいたい似たりよったりである。「三大礼賦」などは、用語も内容もともに荘厳で、唐初の人々が到底及ばないほどのものである。〕

（陳振孫『直齋書錄解題』卷十六、「王洙本杜工部集」）

開元・天宝以前の文章は似たり寄ったりというのは、杜甫の文章をフォローしているようで、実際は有象無象と違わないと言っているようである。それに反して、「三大礼賦」は初唐の人々も及ばないものだと絶賛する。しかし、「三大礼賦」は、その内容はともかく、文章として読みやすいものであろうか。駢文でも読みづらいものがあるのは、「課伐木」でも示した。ただ、駢儷体で書かれるのが自然な「賦」と「駢文調の散文」では、読みづらさのレベルが違うであろう。

以下、杜甫の「賦」と「駢文調の散文」の文章の違い、および、「古文体の散文」がなぜ読みづらいのか、そうした文章を書くことに意義はあったのかについて考えてみたい。

#### 一、賦と駢文調の散文

まず、④「朝献太清宫賦」（『詳注』卷二十四、二一〇五頁）と⑤「雑述」（同上、卷二十五、二二〇七頁）の冒頭部分を比較してみたい。

④冬十有一月、天子既納処士之議、承漢繼周、革弊用古、勸崇揚休。明年孟誨、將據大礼以相籙、越彝倫而莫儔。歴良辰而戒吉、分祀事而孔修。宮室主夫宗廟、乘輿備乎冕裘。甲子王以味爽、春寒薄而清浮。虚閭闔、逗蚩尤、張猛馬、出騰虬、捎熒惑、墮旄頭、風伯扶道、雷公挾輶。通天台之双闕、警溟漲之十洲。浩劫礪礪、万仙颯颯。欵臻於長樂之舍、崑入乎崑崙之丘。

⑤杜子曰、凡今之代、用力為賢乎、進賢為賢乎。進賢為賢、則魯之張叔卿・孔巢父。二才士者、聰明深察、博辯閎大、固必能伸於知己、令問不已、任重致遠、速於風飄也。是何面目黧黑、常不得飽飯喫、曾未如富家奴、茲敢望縞衣乘軒乎。豈東之諸侯深拒於汝乎、豈新令尹之人未汝之知也。由天乎、有命乎。

④は、「孟誨」・「彝倫」など仰々しい言葉が目立つほか、「閭闔」・「蚩尤」などの固有名詞、「勸崇揚休」・「分祀事而孔修」などの典故をつづめたりひきのばしたりした表現がある。対偶表現によって言葉の構造は比較的理解しやすいが、内容自体は古典に精通していないと理解が難しい。⑤には仇兆鰲が注を付していないのに、④は全ての句に注を付しているのも対照的である。

⑤は、「張叔卿」・「孔巢父」などの固有名詞を除けば、言葉自体は難しいものではなく、「用力為賢乎、進賢為賢乎」や「聰明深察、博辯閎大」など分かりやすい対句表現もある。ただ、駢文でも分かりづらいところはある。たとえば、「常不得飽飯喫、曾未如富家奴」は、「飽飯の喫（※飽を形容詞、飯を量詞、喫を名詞と見なす）」なのか、「飯喫に飽く」なのか判別しづらい。また、「由天乎、有命乎」の「有」も意味がとりづらい。駢文であるがゆえに、「由」

にひきずられて、「有」が本来の「ある・もっている」という意味なのか、ほかの意味があるのか却って迷うことになる。これは、口語や方言が関係しているかもしれない。

また、「課伐木」の序文でも触れたように、助字があれば解決できるものでもある。「飽飯喫」・「富家奴」は、「飽飯之喫」・「富家之奴」か「飽於飯喫」・「富於家奴」などとなっていれば誤解は生まれぬはずである。「何面目黧黒」や「新令尹之人」などは、用いる助字の選択や配置場所が現代人の感覚からすると違和感がある。「如何面目黧黒」とすれば「何の面目」と誤読することもないし、「新任之令尹」としたほうが分かりやすいように思う。こうした助字などを極力廃したスタイルや、逆に助字が奇妙な位置に配される文は唐宋八大家の古文に近い<sup>(3)</sup>。

④も⑤も駢文であっても読みづらいところがあった。ただ、その理由は異なる。④は言葉が荘嚴で典故にもとづくものが多いという特徴による。これは、「賦」という文体の性質のほか、天子に奉る公の文であることも関係している。⑤は言葉が口語・方言のような印象を与え、かつ、助字が少ないために読みづらくなっていた。

④の特徴は裏を返せば、典故などの特殊な言葉を知ってさえいけば理解が容易になるということである。そして、朝廷に仕える、もしくは官途を目指す当時の士大夫層からすれば、④に見られる言葉・典故はそれほど難しいものではなかったであろう。②で「開・天以前の文体は大略 皆 此くの如し」というように、杜甫以前の文章も公的なものは④と同じような特徴を備えている。試みに、李善の⑥「上文選注表」(『文選』巻首)の冒頭部分を挙げる。

⑥臣善言、窃以道光九野、縉景緯以照臨。徳載八埏、麗山川以錯峙。垂象之文斯著、含章之義聿宣。協人靈以取則、基化成而自遠。故羲繩之前、飛葛天之浩唱。媧簧之後、揆叢雲之奧詞。步驟分途、星躔殊建。球鍾愈暢、舞詠方滋。楚国詞人、御蘭芬於絶代。漢朝才子、綜盤輓於遥年。虚玄流正始之音、氣質馳建安之体。長離北度、騰雅詠於圭陰。化龍東驚、煽風流於江左。

⑥は賦ではないが、「景緯」・「八埏」などの仰々しい言葉のほか、「羲繩之前」や「楚国詞人」などの知識を要する言葉が並ぶのは④と共通する。それは同時に、同じ駢文の様式を備えていても、⑤とは用語や表現が異なることを意味する。

③で「三大礼賦」は唐初の人には到底書けない作品だというのが、表現的な部分に関しては、実際のところそれほどの差はないであろう。「開・天以前の文体は大略 皆 此くの如し」というのが、杜甫の散文を擁護するための発言であるならば、それは、杜甫の散文が初唐の風格、延いては六朝の駢儷文の風流を汲んだものであることを意味しよう。こうした文章の多くは、献上や出世を目的とした公的なものだったのではあるまいか。韓愈の復古を唱える以前の文章が文学史的に軽視される傾向にあることを考えれば、杜甫のこうした散文が冷淡に扱われるのもうなずける。実際『詳注』に収録される文章の半分は公的なものである<sup>(4)</sup>。

ただ、杜甫の「三大礼賦」などが一方で評価されるのは、その全体の分量と、それを書き上げ、公に認められんとする熱情によるのかもしれない。「進鵬賦表」(『詳注』巻二十四、二一七二頁)に、

⑦臣幸頼先臣緒業、自七歳所綴詩筆、向四十載矣、約千有餘篇。今賈・馬之徒、得排金門上玉堂者甚衆矣。惟臣衣不蓋体、嘗寄食於人、奔走不暇、祇恐轉死溝壑、安敢望仕進乎。伏惟明主哀憐之。倘使執先祖之故事、拔泥塗之久辱、則臣之述作、雖不能鼓吹六經、先鳴數子、至於沈鬱頓挫、隨時敏捷、揚雄・枚舉之徒、庶可企及也。

とあるように、杜甫自身、漢代の賈誼・司馬相如・揚雄・枚舉を意識していたことが窺える。学問を磨く努力を続けてきた自分ではなく、「賈・馬之徒」が出世していくことへの不満が見えるところや、最後の「沈鬱頓挫、隨時敏捷に至りては、揚雄・枚舉の徒、庶ど企及すべきなり」というのなどは、実際のところ漢賦の名手よりも優れた文章を作れるという自負さえ抱いているようである。

## 二、駢文調の散文と古文体

駢文調の散文は、句読を切りやすいという点で賦と同じ利点があった。ただ、それは必ずしも内容の理解を助けるものではなかった。賦も散文も内容理解が容易ではない点は一致するが、その原因は用語・表現の違いにあったといえる。その違いは公的か否かである。駢文調の散文が読みづらいのは、一つにはプライベートな内容を有しているからである。⑤「雑述」などは孔巢父らの有能さを顕彰するためのものであった。また、一つには用語が復古派的な助字の省略であった点にあるといえそうである。この点、駢文調とはいっても、内容・用語・表現の面では②で例示されている古文体の文章と変わらないと言ってよい。

プライベートに関わる作品が杜甫の用語に変化を与えることについて、次の指摘がある。

⑧此章「贈王倚」、後有「贈姜七少府」詩、皆用方言諺語、蓋王・姜二子、本非詩流、故就世俗常談、發出懇至真情、令其曉然易見。文章淺深、隨人而施、此其所以有益也。

〔この「病後過王倚飲贈歌」と「闕鄉姜七少府設鱸戲贈長歌」(卷六)は、共に方言・諺語を用いている。恐らく、王倚と姜七が詩人ではないから、世間一般の言葉で真心を述べて、彼らにはっきり伝わるようにしたのであろう。文章の表現レベルは、人によって変える。それは有益だからである。〕

(「病後過王倚飲贈歌」仇兆鰲注、『詳注』卷三、二〇一頁)

杜甫は「文章の浅深」を、「人に随って施」していたことが分かる。こうした社会的な階層レベルでの文章の使い分けは、当時の士大夫層であれば当然行っていたものであろうが、杜甫の場合はそれが表面化しやすいのかもしれない。それは、杜甫の境遇が士大夫としては不遇であって、江湖に過ごした時間が長かったことが関係しているであろう。また、官僚とも友人として付きあうことで、言語の使い分けが曖昧化したかもしれない。

⑧は詩についての発言だが、これは文章にも適用されるようである。杜甫が遺した最も短い文章である詩題を幾首か見てみたい。

⑨臨邑舍弟書至、苦雨、黄河泛溢堤防之患、簿領所憂、因寄此詩用寬其意(卷一)

⑩送孔巢父謝病歸、遊江東、兼呈李白(卷一)

⑪陪諸貴公子丈八溝、携妓納涼、晚際遇雨(卷三)

⑫夜聽許十一誦詩、愛而有作（卷三）

⑬送鄭十八虔貶台州司戶、傷其臨老陷賊之故、闕為面別、情見於詩（卷五）

⑭送許八拾遺歸江寧觀省、甫昔時嘗客遊此郡、於許生處乞瓦棺寺維摩圖樣、志諸篇末（卷六）

⑮路逢襄陽楊少府入城、戲呈楊四員外綰（卷六）

◆原注 甫赴華州日、許寄員外茯苓。

上の詩題を見ると、親族や友人とのやりとりであるためか、つけんどんな印象を与える文章である。先に言及したような助字や動詞があればいっそう分かりやすくなりそうなものが多い。復古派的な古文である。これは、杜甫と詩文を送る、もしくは、描写対象となる相手との心理的距離が近いことと関係するのだろうか。

③で読みづらいとされていた「課伐木」も童僕に向けられたものであったし、「送大理封主簿五郎……」も知人のためにお見合いを手配しようとしたものである。「觀公孫大娘弟子舞劍器行」は描写の対象が舞姫である。その序文を見てみたい。

⑯大曆二年十月十九日、夔州別駕元持宅、見臨穎李十二娘舞「劍器」、莊其蔚跂。問其所師、曰、「余公孫大娘弟子也」。開元三載、余尚童稚、記於郾城、觀公孫氏舞「劍器」・「渾脫」、瀏灑頓挫、獨出冠時。自高頭宜春・梨園二伎坊內人、洎外供奉舞女、曉是舞者、聖文神武皇帝初、公孫一人而已。玉貌錦衣、況余白首、今茲弟子、亦匪盛顏。既辨其由來、知波瀾莫二。撫事慷慨、聊為「劍器行」。昔者吳人張旭、善草書書帖、數嘗於鄴郡見公孫大娘舞「西河」・「劍器」、自此草書長進。豪蕩感激、即公孫可知矣。

句讀が切りづらいという難点のほか、用語の選別もあまり配慮がなされていない。たとえば、一人称が「余」しかないために、これが李十二娘を指すのか、杜甫を指すのか不明瞭になっている。もし全てが李氏を指すのなら、「曰」以下のセリフは「況余白首」までかかってくる。そうすると、文章全体の意味がだいぶ変わってくる。「記於郾城～」も「記（覚えている／思いだす）」を「記得」と二字にのぼすか、「於」の前に「曾・嘗・昔」などを添えるだけでだいぶ読みやすくなるはずである。助字や動詞を極力省くような姿勢がここにも見える。

### 三、そのほかに気づくこと

杜甫の散文は若い時期に集中している。公的な作品が多いことを考えると、若い時期は出仕の希望を抱いていたから集中的に作品をのこしたと言えるかもしれない。そして、しだいに散文が作られなくなっていくのは、杜甫の場合、散文の役割を詩に担わせていた、もしくは、詩に担わせることのほうが向いていたと気づいたからではないだろうか。歴代の批評家には、杜甫の詩と韓愈の文章を関連づけているものや、詩が尺牘や史書の代わりになっていることを指摘するものがある。※印は『詳注』に引かれる注・評。

⑰奉贈韋左丞丈二十二韻（卷一）

※范元実『詩眼（＝潜溪詩眼）』曰、山谷謂文章必謹布置、每見後学多告以「原道」命

意曲折。後予以此概考故人法度、如子美「贈韋左丞」詩云「紈袴不餓死、儒冠多誤身」、此一篇立意也、故使人靜聽而具陳之耳。……此詩前賢錄庄卷、其布置最得正體、如官府甲第、厅堂房舍、各有定處、不可亂也。韓文公「原道」与『書』之「堯典」蓋如此、其他皆謂之變體可也。

⑱天育驃凶歌（卷四）

※趙曰、韓退之文、「世有伯樂、然後有千里馬」、「千里馬常有、而伯樂不常有」。意本杜。

⑲自京赴奉先縣詠懷五百字（卷四）

※『碧溪詩話』、『孟子』七篇、論君与民者居半、其余欲得君、蓋以安民也。觀杜陵「究年憂黎元、歎息腸內熱」……其仁心廣大、異夫求穴之螻蟻輩、真得孟子所存矣。東坡先生問老杜何如人。或言似司馬遷、但能名其詩爾。愚謂老杜似孟子、蓋原其心也。

※葛常之『韻語陽秋』曰、子美高自稱許、有乃祖之風。上書明皇云、「臣之述作、沈鬱頓挫、揚雄・枚舉可跂及」。「壯遊」詩、則自比於崔魏班揚。

⑳北征（卷四）

※王嗣爽曰、昌黎「南山」、韻賦為詩。少陵「北征」、韻記為詩。體不相蒙。

※葉夢得曰、……至杜子美「北征」・「述懷」諸篇、窮極筆力、如太史公紀傳。此古今絕唱也。

㉑送李校書二十六韻（卷六）

※王嗣爽曰、此明是一篇送人序、韻而為詩、語皆工鍊、而氣獨流暢。

㉒端午日賜衣

※鍾惺曰、此詩是近臣謝表、語風趣而典。

⑰⑱の詩と韓愈の文が比較されること、また、杜甫の散文が極力助字や動詞を省く傾向があることを踏まえると、杜甫の詩文が韓愈の復古文に何かしら影響を与えているかもしれない。

また、散文が若い時期に作られているのとは反対に、『詳注』巻二十以降、晩年に近づくにつれて詩題が長文化していくのも注目できる現象である。長い詩題は蘇軾など宋代以降の詩人によく見える傾向である。ここにも影響関係があるかもしれない。

【注】

- (1)「杜甫の『文』をめぐって—『典型化と対偶化の思考』をてがかりに—」（『中国詩文論叢』第二十一集、二〇〇二）。
- (2)「課伐木」（『詳注』巻十九、一六三九頁）の序文を挙げる。◆を境にして前後半を分ける。「課隸人伯夷・辛秀・信行等、入谷斬陰木、人日四根止、維条伊枚、正直挺然。晨征暮返、委積庭内。我有藩籬、是缺是補、載伐条簞、伊仗支持、則旅次小安。◆山有虎、知禁、若恃爪牙之利、必昏黑撞突。夔人屋壁、列樹伯荀鋸為牆、實以竹、示式遏。為与虎近、混淪乎無良。賓客憂害馬之徒。苟活為幸、可默息已。作詩示宗武誦」。

佐藤氏は歴代この序文が特に難解とされており、中でも「山有虎、知禁」には脱文があると歴代の評論・注釈者にいわしめるほど理解が容易ではないと指摘している。

(3) たとえば、韓愈「師説」の第二段落の終わりの部分、

●句読之不知、惑之不解、或師焉、或不焉。小学而大遺。吾未見其明也。

はじめの四句は、「句読之不知、或師焉、惑之不解、或不焉」のようにしたほうが、まだ理解が容易ではないだろうか。対句が意識されるゆえにかえって読みづらくなっている。また、「小学而大遺（句読のような些末なことは師について学び、惑いを解くような重要なことは師に就かない）」も助字がなく、用語も最低限に絞られているがゆえに、初見で意味を把握するのは容易ではない。本来、目的語にくる「小」・「大」を主語の位置に置くのは強調のためでもあろうが、それなら助字を使って「以小学、又以大遺」などとしても良いように思える。

また、第三段落の前半部分、

●巫医楽師百工之人、不恥相師。士大夫之族、曰師、曰弟子云者、則群聚而笑之。

問之則曰、「彼与彼年相若也、道相似也。位卑則足羞、官盛則近諂」。

「～之人（～のような人たち）」であるが、「若～之人」とするのが当時の文体ではなかろうか。また「曰師、曰弟子云者」も「云」は無くても良さそうなものである。ほかに「彼与彼年相若也、道相似也」なども対句であるが故に読みづらくなっている。「若」は「如」・「似」と同じ用法だが、上記のような用法は、かえって口語・方言的なものではないだろうか。

このほか、欧陽脩の「醉翁亭記」なども漢字の持つイメージを生かして、最小限の言葉で、意思を伝えようとした作品である。

●環滁皆山也。其西南諸峰林壑尤美也。望之蔚然而深秀者、琅邪也。山行六七里、漸聞水聲。潺潺而瀉出于兩峰之間者、釀泉也。峰迴路轉有亭。翼然臨于泉上者、醉翁亭也。

「環滁皆山也」は、「有」字があるのが自然であろう。「望之蔚然而深秀者」は「望」が名詞か動詞かはっきりしない。助字の「則」か動詞の「有」が「之」の下にあれば、理解が容易になる。ただ、解釈に揺れが生じるのは、文学的な価値を失うものではない。多様な解釈が容認されるからこそ、後世まで議論され継承されていく。むしろ『詩経』や「樂府」のように、曖昧な表現でしか伝えられないものもある。

拙論では、杜甫の散文の読みづらい面として、古文的用語・措辞に注目してきたが、こうした表現は、上記したように唐宋八大家の古文と通じるところがある。これは裏を返せば、杜甫の散文は唐宋八大家の文章と同じか、もしくは近いレベルで読むことができることを意味する。

(4) 「進三大礼賦表」・「朝献太清宫賦」・「朝享太廟賦」・「有事於南郊賦」・「進封西岳賦表」・「封西岳賦」・「進鵬賦表」・「鵬賦」（以上『詳注』卷二十四）、「為閩州王使君進論巴蜀安危表」・「為夔府柏都督謝上表」・「為遺補薦岑參狀」・「奉謝口勅放三司推問狀」・「為華

州郭使君進滅殘寇形勢図状」・「乾元元年華州試進士策問五首」・「説旱」・「東西兩川説」  
(以上、『詳注』卷二十五)